石垣会ペンテコステ集会
聖霊の賜物
――使徒行伝第10章――

（「石垣会だより」第16号１９６９年6月15日より転載）

１９６９年5月18日
小池辰雄

キリストの兵卒　キリスト化現象　霊化・恵化・信化　十字袈を通さなくては聖霊は来ない
あるがままの姿　聖霊の最大のたまものは愛

【使徒10】

1ここにカイザリヤにコルネリオという人あり、イタリヤ隊と称うる軍隊の百卒長なるが、2敬虔にして全家族とともに神を畏れ、かつ民に多くの施済をなし、常に神に祈れり。3或日の午後三時ごろ幻影のうちに神の使きたりて『コルネリオよ』と言うを明かに見たれば、4之に目をそそぎ怖れて言う『主よ、何事ぞ』御使いう『なんじの祈りと施済とは、神の前に上りて記念とせらる。5今ヨッパに人を遣してペテロと称うるシモンを招け、6彼は皮工シモンの家に宿る。その家は海辺にあり』7斯く語れる御使の去りし後、コルネリオ己が僕二人と従卒中の敬虔なる者一人とを呼び、8凡ての事を告げてヨッパに遣せり。

9明くる日かれらなお途中にあり、既に町に近づかんとする頃おい、ペテロ祈らんとて屋の上に登る、時は昼の十二時ごろなりき。10飢えて物欲しくなり、人の食を調うるほどに我を忘れし心地して、11天開け、器のくだるを見る、大いなる布のごとき物にして、四隅もて地に縋り下されたり。12その中には諸種の四足のもの、地を匍うもの、空の鳥あり。13また声ありて言う『ペテロ、立て、屠りて食せよ』14ペテロ言う『主よ、可からじ、我いまだ潔からぬもの穢れたる物を食せし事なし』15声再びありて言う『神の潔め給いし物を、なんじ潔からずとすな』16かくの如きこと三度にして、器は直ちに天に上げられたり。

17ペテロその見し幻影の何の意なるか、心に惑うほどに、視よ、コルネリオより遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、18訪いて、ペテロと称うるシモンの此処に宿るかを問う。19ペテロなお幻影に就きて打案じいたるに、御霊いい給う『視よ、三人なんじを尋ぬ。20起ちて下り疑わずして

共に往け、彼らを遣したるは我なり』21ペテロ下りて、かの人たちに言う『視よ、我は汝らの尋ぬる者なり、何の故ありて来るか』22かれら言う『義人にして神を畏れ、ユダヤの国人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を家に招きて、その語ることを聴けとの告を受けたり』23ここにペテロ彼らを迎え入れて宿らす。

明くる日たちて彼らと共に出でゆきしが、ヨッパの兄弟も数人ともに往けり。24明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを待ちいたり。25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』27かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、28『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。29この故に、われ招かるるや躊躇わずして来れり。然れば問う、汝らは何の故に我をまねきしか』30コルネリオ言う『われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を著たる人、わが前に立ちて、31「コルネリオよ、汝の祈は聴かれ、なんじの施済は神の前に憶えられたり。32人をヨッパに送りてペテロと称うるシモンを招け、かれは海辺なる皮工シモンの家に宿るなり」と云えり。33われ速かに人を汝に遣したるに、汝の来れるは忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給いし凡てのことを聴かんとて、神の前に在り』34ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、35何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。36神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。37即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。38これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。39我等はユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行い給いし諸般のことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。40神は之を三日めに甦えらせ、かつ明かに現したまえり。41然れど凡ての民にはあらで、神の預じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦え給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。42イエスは己の生ける者と死にたる者との審判主に、神より定められしを証することと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じ給う。43彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の

赦を得べきことを証す』

44 **ペテロ尚これらの言を語りおる間に、聖霊、御言をきく凡ての者に降りたもう。** 45 **ペテロと共に来りし割礼ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物のそそがれしに驚けり。** 46 **そは彼らが異言をかたり、神を崇むるを聞きたるに因る。** 47 **ここにペテロ答えて言う『この人々われらの如く聖霊をうけたれば、誰か水を禁じて其のバプテスマを受くることを拒み得んや』** 48 **遂にイエス・キリストの御名によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請えり。**

●キリストの兵卒

百卒長の信仰をマタイ伝8章5～10節のところでイエスさまが非常に称えておられる。

「5 イエス、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、6 請いていう『主よ、わが僕、中風を病み、家に臥しいて甚く苦しめり』 7 イエス言い給う『われ往きて医さん』 8 百卒長こたえて言う『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。 9 我みずから権威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言えば往き、彼に「きたれ」と言えば来り、わが僕に「これを為せ」といえば為すなり』 10 イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。』（マタイ8・5～10）

これはキリストの言葉を直下に受けて、

「ひとこと言って下さればよいです」

と。そういったような気合です。本当に

「然り！」

という気持のよいこの「はい」という返事。

「はい！」

と服従してゆく気持の中に非常に大事なものがあります。

我々は絶対に服従する世界ですから、

「汝の御意を成させ給え」

と、神の言葉を絶対に受けたのはキリストです。神の意に対して一言も抗弁しなかった。十字架にまでかかった。これは神の命令を百％に受けてゆく。これが信仰の世界です。コルネリオもまたそういう百卒長であった。パウロもテモテに言っているように、

「2 且おおくの証人の前にて、我より聴きし所のことを他の者に教え得る忠実なる人々に委ねよ。 3 汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難

を忍べ。」（テモテ後2・2～3）

「我々はキリストの兵卒である」

という。

「忠実なる人々に委ねよ」

とは、神への忠実なる者の最たる者です。即ち信を貫く者が忠実なるもの。私はこれを

「信実」

と訳したい。こっちの「真実」はただ、心が真で主観的です。信仰の信に実を書く方が神に対して信実なので、この「信実」は「アーメン」ということです。

「2**敬虔にして全家族とともに神を畏(おそ)れ、かつ民に多くの施済(ほどこし)をなし、常に神に祈れり。」（使徒行伝10・2）**

「敬虔にして全家族とともに神を畏れ」

という。ここにも「畏神」という言葉が出ている。私たちがいつも言わざるを得ないのは、今の学生諸君が神を畏れることを忘れてしまっているのが、日本の精神的危機の一番最大の原因です。「民主主義」なんてとんでもない――「民主」の前に「神主(しんしゅ)」でなくてはならない――

「神主主義」

であるということを忘れてしまっている。リンカーンは決してそんな民主主義を言ったのではない。リンカーンのリンカーンたるところは本当に神を畏れる人であった。日本の教育は絶対に宗教的なところから立て直さなければ百年たっても二百年たってもダメです。

「神を畏れる」

とはただ気持の上で畏れるのではない。「神を畏れる」とは全存在で「平伏しの魂である」こと。いつも私たちはキリストを見なくてはいけない。キリストはどういう方であったか。キリストは本当に神に平伏していた。これが

「霊が貧しい」

ということです。

●キリスト化現象

木喰(もくじき)上人の歌に、

「六道をつくしてみれば何あらん仏も鬼も心なりけり」

六道(ろくどう)〔仏教において衆生がその業の結果として輪廻転生する六種の世界〕のことの究極は心の問題であったというんです。六道をつくしてみたらば、結局、心が仏心となるか、鬼心となるかの話だ。天国となるか地獄となるか。心がとかく鬼心的に自己中心となると、鬼の心に変わる。自分の心に絶して無心になると、仏心の方になる。本来、心は仏性をもっていたはずであったのに、知らぬ間に鬼心となってしまった。

もうこれはキリスト教と同じです、そういう言い方をしているところは。本来、人は神の似姿に創られていた。その似姿に創られていたのがサタンの誘惑でとうとうサタンの手下になっている。問題はその心がいずこに帰命するかにある。

「25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』」（行伝10・25～26）

「立て、我も人なり」と。使徒行伝3章6節を見ると、

「3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』」（行伝3・3～6）

乞食が何かくれるかと思って見ていると、ペテロは、

「我らを見よ」

と言った。私の内に或る変わったものがある。それが、

「我が内にあるものを見よ」

です。これは大事なことです。人間小池なんかしょうがないやつです。けれども、

「私のうちにあるものを見よ」

と私は言いたい。もうキリスト化現象が起きている。相対的でありながら、絶対的なものがそこにある。相絶一如の世界。それがペテロの言った、

「我を見よ」

なんです。心と魂と体は表現の上では分析します。だけれども、心と魂と体は一如の世界です。そういう未分の世界を、本当の姿をワッとつかむようにならないと、宗教の世界は本ものにならない。一番本当の姿は無意識で何かしているその姿です。

「自分は何か善き事をしている」

なんて、その意識のあるうちはまだ本当の善い世界ではない。

●霊化・恵化・信化

キリストが言ったではないですか。マタイ伝25章31節から、

「31人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。32かくてその前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33羊をその右に、山羊をその左におかん。34ここに王その右におる者どもに言わん『わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。35なんじら我が飢えしときに食わせ、渇きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36裸なりしとき

に衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり』37**ここに、正しき者ら答えて言わん『主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渇きしを見て飲ませし。**38**何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。**39**何時なんじの病みまた獄に在りしを見て、汝にいたりし』**40**王こたえて言わん『まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり』（マタイ25・31～40）**

キリストがその栄光をもって来た時、もろもろの国人を羊と山羊に分けて、

「お前は私にこういった善きことをした」

「いつそんなことをしたでしょうか？」

と。あれが本当の「ウニオ」（unio　一つ、合一）の世界です。

「右手のすることを左手に知らすな」（マタイ6・3）

と、これが「ウニオ」の世界。最高の世界は「一」の世界です。

「34**ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、**35**何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。」（行伝10・34～35）**

「神は偏ることをせず」という。

「汝ら父の如く全かれ」

と。これは有名な山上の垂訓の一番の素晴らしいところ。

「父の全き如く」

とは、そういう分けへだてをしないということです。善悪正邪の分け隔てをしない。これは仏教の最後の世界と同じことをキリストは言っておられる。善悪の区別、差別をしているうちはダメだと。これは普通の道徳では当てはまらない。善悪正邪がみんな要らなくなってしまえば、

「もう勝手なことをしよう」

ということになるから。

「善悪正邪、そういうことに関わりなく、恵みのみを与える。光を与える。これを恵むのに何にも差別をするな」

と。この悪の世界を、相対的な善も悪も本当の善に、みんな絶対的な善、正、真に全部変えてしまう。人間の世界の善や悪なんてものは、絶対的な差ではない。相対的の差に違いない。みんな人なんだから。それを全部、化してしまう。「化」という字は、人間がひっくり返っているすがた。これは死の姿です。人間が死ぬと、本当のものに化すると、変っていく。生まれつきの我に死ぬならば大変化が起きる。これを「化」という。

だから、信仰によって化するから、「信化」という言葉が出来るようなものです。そういう信化だから、これはみんな恵みによって「恵化」される。恵みによって化せられてゆく。

これも本当の善に、悪は本当の善に全部霊的変化を起こす。霊化現象です。恵化、信化という。我々が「かたよりみない」ということは、どの人を救い上げようと、神の意志が働いたら、かたよりみないです。そうでなく人を比較していたらいつになってもダメです。一人ひとりが天下一品なんだから、比較なんかしていたらダメですよ。神さまに天下一品に創られている。どんな事態でも。だから、皆さんが本当に――今日は石垣会のペンテコステだから――聖霊の人となるならば、必ず天下一品となる。せっかく天下一品の約束をされているのに、その約束の実を現わさなくては。実を現わすのには人間的な努力では化らない。

●十字架を通さなくては聖霊は来ない

「[36]**神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。**」（**行伝10・36**）

これは「平和」ではなく、「平安」と先ず言わなくては。「平安の福音」です。平和というと直ぐ何か政治的な気持が湧いてくる。これは「平安、シャローム」です。神と人との関係です。キリストと我との関係が、魂が本当に安らいでいる。

「何か自分はおかしい」

と思ったら、先ずキリストとの関係を自分がやりかえさなければいけない。

「今日は気分がおかしいな」

と思ったら、キリストのところへ持ってくれば、気分なんかどこかへ行ってしまう。それが平安です。そうすると、人に対して平和ならしむる者となる。そうしたら、それが流れて人に対して平安を与える。

「汝は我が主なり」

と。イエス・キリストは聖霊の人、み霊の人、最高のみ霊の人です。なぜ最高にみ霊の人であったかというと、イエスは祈りの人であったから。祈りの人でなければ絶対に聖霊の人になれない。祈りなくして霊はこない。聖霊は驚くべき力を持っている。神威をもっているから、それでサタンをやっつける。悪鬼を追い出し、悪鬼に制せられているものをみんな癒した。

今の人にはそういうことは解らない。だけれども、私たちがキリストの十字架を負って、その贖罪を本当に受けて、そこでキリストから賜わる霊は絶対に聖霊ですから何にも心配ない。十字架を抜かしていたらダメです。

もうここで、聖霊は絶対に十字架を通さなくては来ないということがはっきりした。十字架と聖霊は、私たちを永遠の生命、神の国に、死んでも死なないところの霊肉渾然たる救いの歓喜の世界に入れる。本当に人を幸いにする。一切を済度していく世界にするために。そのようなものすごい力強い、如何なるものもこれを妨げることのできない、すごい生命の光の愛の世界に入ったら、このキリストを身に体したら、もうパウロはやりきれない。

パウロの伝道はそこから始まっている。だから一切の患難を突破することができた。

●あるがままの姿

「み名によりて」ということ。聖書の言葉は霊言ですから、この文字の読んだ音の奥にその音を通して本当の言葉――それ自身が霊言であると同時に根源的な霊言――を聞かなければ、聖書を読んでいることにならない。だからキリストは、

「我が言（ことば）は霊なり、生命（いのち）なり」

と言われた。それを全身で受けとれば、生命と化してゆく。もう私たちは何にも心配はいらない。キリストは、

「お前を本当に受けとるために、救い入れるために私はやって来たんだ」

と。キリストは、いつも自分を開け放して自分を投げ捨てている人、自分自身を投げ入れる人、そこにどっかり尻もちをつく人――それはみんなあるがままの姿です――あるがままの姿でそこに自分を投げ出している人、そういう人を救い入れるために来られた。「在る」という事が

「尻もちをついている」

ということ。立っていようが座っていようが寝ていようが同じことです。そういうのが本当に開け放しの姿。それはもう相手に向かって全部投げ出しているので、直ぐ霊言が入ってくる。生命となって入ってくる。聖書の読み方はみんなそうです。

「こうであろうか、ああであろうか」

と分別しているうちはダメ。

「あるがまま」

ということが「全的」ということです。

聖霊の賜物（たまもの）の一つとして「異言（いげん）」のことが出ている。けれども、聖霊そのものが最大の賜物です。賜物中の賜物は私たちの頂く聖霊です。聖霊を本当に頂けば、その人がそのときに異言となろうが、「霊歌」となろうが、「神癒」の業となろうが、あるいは学問上のことになろうが、芸術のこととなろうと、事業のこととなろうと、何でもよいのです。そういったことが全部この聖霊という賜物からいろいろの「カリスマタ」が、賜物が出てくる。実際、聖霊を宿せば、必ず賜物が現象してくるはずです。

●聖霊の最大のたまものは愛

木喰（もくじき）和尚の歌に、

「風吹かば心の雲を吹き払いいつも涼しき十五夜の月」

この「風吹かば」というのは私たちに言わせれば、「霊風」が吹いてくれれば私たちの心の中にある雲が吹き払われてしまって、「いつも涼しき」どころではない、いつも非常に明ら

かな――「十五夜の月」ではない――「義の太陽」だ。我々の中にこのキリストの霊風か吹いて聖霊が来たると、どのような雲霧がありましても吹き払われていくことができる。私みたいなやつが、この聖霊を頂きましてからは、まぁ何ともいえなく楽になってしまったから仕方がないというはなしです。皆さんもそういう告白がなされると思います。

「一心をつくし切ってあとを見よ地上と仏と変わらざりけり」

この一心が本当にみ霊の心となる。そうしたならば即ち、私たちみたいな凡人が、罪人（つみびと）がキリストと変わらなくなってくるという。我が内に本当にキリストが宿り給うて――もちろん地上においては不完全です、どこまでも平伏しです、私たちは死に至るまで――けれども、死に至るまで平伏してありながら、本当に主イエス・キリストが自分の心となって、み霊の主が私たちの中心となってくれば、これ〔三日月〕は必ず満月となる。必ず

「栄光より栄光へ至る」

と、キリストははっきりとその完成を約束されている。どのような事態であっても、皆さんはそれぞれのっぴきならぬ天下一品性をもって完成されてくる。なんと楽しい人生か。その完成は何のためか。それは全うされながら、人をやっぱり同じように幸いにしていく。やはり天下一品の者に変えてゆく。そういった使命をもったもので、

「自分がよくなっておしまい」

なんていうものではない。福音の世界はどこまでも人を救い上げていく。

そこで聖霊の最大の賜物（たまもの）は愛ということになるわけです。「愛」とは「人を救い上げる」ことです。愛するとは人を救い上げることで、人間の感情的な愛とは違う。相手を救い上げ荷（にな）い上げてゆくことが愛です。だから、この聖霊がきたならば、

「敵を愛する」

ことができる。何とならば聖霊はものすごい力をもっているから。

何ものにも負けない、パウロがロマ書8章で言うところの、絶叫しているところの愛です。また、エペソ、ピリピ、コロサイ書あたりで言っているところの世界がそれなんです。もう生命であり、光であり、愛である。何とも言えないところのこのみ霊は人を生かす。

「人を光あるものにする。人を愛あるものにする」

という在り方が聖霊の一番根源的な性格です。聖霊は人を救う霊である。

「私たちは霊的になった」

なんて、いい気に絶対になってはいけない。キリストの霊は人を救う霊である。即ち、

「キリストは十字架を荷（にな）えり」

とは、そのような人を救う力ある霊であるから、本当に十字架を負う。十字架を負うとは自分で荷ってゆく姿です。聖霊の人となったら、皆さん一人ひとりはみんな伝道者です。もう皆さんは本当に生きがいのある人生とされました。